

---

# 六人のチート魔法軍団

こなた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

六人のチート魔法軍団

### 【Nコード】

N0971Z

### 【作者名】

こなた

### 【あらすじ】

チートな六人の魔法使いが世界をすくつたり、すくわなかつたり、

## 誘拐（前書き）

初の作品&いままで物語とか書いたことのないのでよみにくかったり、内容がおかしくなったりします。ただの気まぐれですのであしからず。内容がおかしくなったら言うてくれると助かります。誤字、脱字もじゃんじゃん指摘してください

## 誘拐

今は3054年

今から1000年前、地球は地球温暖化という異常気象をおこした。地球から生きている生命は消えるはずだった。神はその現象を止め復興のために力を授けた。俺たちが使っている魔法はその時生まれた。人々はその力で見事この地球を復興させた。そして欲の強かった人間は戦争をおこし大量の魔力を消費しつづけた。神が残した魔法石の魔力の生成速度が落ちていき、地球から魔力を吸い取っていった。魔法石のそばにいた動物や植物はその暴走した魔力にあてられ魔物へと変化していった。魔物の存在に気づいた人々は戦争をやめ、自分達の集落に立てこもった。しかし、魔物は堤防などを越えて人々を襲い、動物達を襲った。そこで人々は『魔物討伐組合』を創設し武器や魔法を使い集落の周りは組合に守られるようになった。それから五年の月日が流れた。だいぶ安定してきた組合は、会長を王とし国を築いていった。これが、日本国連邦の誕生である。国と国の間には魔物が寄りにくくする堤防を作り、貿易が盛んに行われた。それによって国同士が安定してきた。余裕が出来た組合は、『魔物討伐組合』から『ブレイブギルド』と改名し人々からの依頼などを受けたりするようになった。

さあ、物語を始めよう

>美咲< 「…え、翔……きて！」

意識の遠くで誰かが叫んでる。聞きなれた声。美咲（みさき）の声だ。なんていつてるのだろうか。

>美咲< 「ねえ！起きてっばー！！」

起きる？学校はまだじゃ……？

>美咲< 「学校じゃないっばー！とりあえずおきてよー！」

体が揺すられている。途端にお腹に衝撃がきた。

>翔太< 「っ！……！！」

僕はその痛みで意識が覚醒した。

>蓮斗< 「やっと起きたか、やっぱりお腹の上にD i v eは人が起きれるようになってるのかねえ」

犯人はこいつか。僕は蓮斗（れんと）をおもいつきりにらみつけた。まあ、全然効かないんだけどね。そして僕は周りの風景の異様さに気づいた。暗くてじめつとしたところというなれば牢屋。

>翔太< 「ここは……牢屋……？」

>蓮斗< 「だな。俺たちはどうやら閉じ込められたらしいな。」

> 翔太 < 「そん……な……」  
> 美咲 < 「どうすれば……いいのかな？」

美咲は今にも泣き出しそうだった。それを必死にこらえているのは優那（ゆうな）がいるからだろう。さつきから泣いている優那を五木（いつき）がなんとかしてあやしてる。

> 凜奈 < 「魔法で扉は壊せないかな？」  
> 蓮斗 < 「さつき試したけどまったく歯が立たなかったよ。」  
> 凜奈 < 「残念。」

コツ……コツ……

足音が聞こえている。こちらに向かってくる。

> ???? < 「やあ、みんなお目覚めかな？」  
> 翔太 < 「！」

誰だ……？

怖い、怖い怖い怖い怖い

> 蓮斗 < 「ここに俺たちを連れ込んだのはお前か？」

蓮斗は怯えながらも強気な態度だ。さすが蓮斗はよくやるよ。

> ???? < 「そう、睨まないでくれ。君達の体をすこし借りた

いだけなんだ。死体でもいいのだけど、君達も死にたくはないだろう？（私も正確なデータを測りたいから）おとなしく付いて来てくれないかい？」

>蓮斗< 「ふざけるな！誰がお前なんかについて行くか！氷よ…  
…行け！」

蓮斗の魔法で作られたつららがこの人に向かっていく。だが、蓮斗の氷は????に着く前に蒸気となって消えていた。

>????< 「氷の魔法ですか。報告書通りですね。」

>蓮斗< 「なっ!?!」

>????< 「素直についてきた方が身の為ですよ？あなた達じゃ私には勝てませんよ。」

その男はクスリと笑うと手を振り上げた。その途端僕達の周りが火の玉で囲まれた。僕達はみんな恐怖の顔に変わっていった。

>????< 「さあ、こちらですよ。」

僕らを閉じ込めていた扉がその声と共に開いた。その時だった。

ウィーーーーーウィーーーーーウィーーーーー

と警報音がなった。

>??>>>< 「いいところだったのに残念ですね。それでは牢屋に入  
つて待つててください。」

僕達は火の玉に牢屋までつれられていった。

>美咲< 「ギルドの人が私達を助けに来てくれたんじゃないかな  
?」

>翔太< 「やった!ここから出られるんだよね。」

僕達に希望がでてきた。

>五木< 「でも、大丈夫かな?」

>翔太< 「何が?」

>五木< 「あの男の人、物凄く強かった。」

>蓮斗< 「それは同感だね。俺の氷があんなに速くとかされるな  
んて……火属性の人間であるレベルだと少なくともギルドランク3  
級以上だな。」

ギルドランクとはギルドの人間の大体の強さを表す階級のことです。最  
低ランクが10級、最高ランクが1級の次のS級だ。S級は今7人  
存在している。

>凜奈< 「なんか来る。」

>優那< 「ギルドの人かな?」



>凜奈< 「数は3 4。武装している。」

>翔太< 「て、敵じゃないよね……?」

>ギルド1< 「君達、大丈夫かい?」

>ギルド2< 「君達さがつててね、今からこの扉を壊す。」

>ギルド3< 『こちら、潜入班。子供6人が閉じ込められています。被害届けがでてたのはこの子達のことでしょう。体の外部に損傷はありません。』

ギルドの人は斧と剣を持ち、扉を叩いた。金属と金属がぶつかりあ  
いものすごい音が出た。ギルドの人が2、3分扉を切り続けついに  
扉が壊れた。僕達はその穴から外に出ることができた。

>ギルド1< 「さあ、ここから出るよ。」

>全員< 「はい!」

僕達はギルドの人に連れられ外に出る事が出来た。そこは『立ち入  
り禁止』の看板があり、周りは廃墟だった。そこは先の戦いで魔物  
が壊したそうだ。

僕達はそのまま親の元へ送還された。僕達はギルドの人みたいにな  
りたいと思うようになった。

それが、僕達を『ギルド専門学院』に入学したいと思っつきっかけに  
なったのだ。

## 受験（前書き）

文才なくごめんなさい！

見てくれた人はありがとうございます！

## 受験

僕達は後日、ギルドに呼ばれていた。それも普通絶対入れないよ  
うなギルドマスターの部屋だった。部屋の中は壺や絵が飾ってあっ  
た。

> 茂く 「今日はよく来てくれた。私の名前は山本茂<sup>やまもとしげる</sup>だ。早速だ  
が今日呼び出したのは君達に隠している事があるのだ。君達は自分  
の適応属性を知っているか？」

適応属性とは11個ある属性の中で唯一使える属性の事である。1  
0個の属性とは火、水、氷、風、雷、地、木、光、闇、幻、である。

> 蓮斗く 「俺は氷つてきいてるぜ。」

> 美咲く 「私は火です。」

> 翔太く 「ぼ、僕は幻です。」

> 五木く 「オレは木だ。優那も木だよな？」

> 優那く 「う、うん。」

> 凜奈く 「……風。」

僕達は5歳の時に受ける適応属性検診というものをうけ自分の適応  
属性をしらべそれがギルマスに渡り保護者へと配布される。親から  
聞いた属性は確かに使えるから、自分の適応属性で間違えはないだ  
ろう。

> 茂く 「まあ、幻以外は大きく珍しくなろう。ただし君達は  
自分達の本当の属性をまだ知らないのだよ。君達は何故誘拐された  
と思う？」

> 蓮斗く 「そんなの知るわけないだろうが。」

> 茂く 「まあ、そうだろうな。君達は特別なんだよ。本来適応属性とは個人が一つしか無いと知っているだろう？だが、君達は二つ以上の属性を持っている。」

> 僕達く 「………！」「……」

僕達はみんな同じような反応をした。当たり前だ。この歴史上、英雄と言われた人だって一つの属性もちなんだ。

> 茂く 「驚くのも無理は無い話だ。私だって見たときは驚き何度も機会の点検をした。専門家にもお願いしたが、結局は分からないままだった。さらに驚くべき事が発覚した。佐藤翔太、伊藤凜奈君達は」

その瞬間僕達は血の気が引いていった。だって……そんな……

### 神の属性もちだ

神の属性とは神が使ったといわれる魔法の属性だ。歴史上、神以外が使ったという話は無く、おとぎ話のみに出てくる誰もがあこがれる属性である。それは、

### 時空属性

自分のテリトリーを作り出しその中では時間の流れすらも操れるようになる。

### 天属性

天候を操れ、雨や霰あられ、突風、竜巻、雷などを作り出す事ができる。

と言ったものである。

> 茂く 「佐藤翔太、君の属性は時空属性と幻属性なんだ。伊藤凜奈、君の風属性とは天属性の中の一つだったというわけだ。」

> 五木く 「オ、オレ達は何なんでしょうか？」

> 蓮斗く 「そうだそうだ、俺らはまだ聞いてねえぞ。」

> 茂く 「そうだったな。鈴木美咲、君は火属性の他に光属性を使う。高橋蓮斗は闇属性、渡辺五木は地属性、妹のほうは水属性が追加される。」

> 蓮斗く 「俺たちの属性の説明は無いのかよ？」

> 茂く 「君達は普通の属性だからね。説明は省略させてもらおうよ。さて、君達は普通ではない二つの属性もちという事で、研究の対象となったわけだ。君達が普通にいと君達や君達の周りの人に危害が加わる可能性が出てくる。そこで、だ。君達に決めて欲しいことがある。一つは君達と君達の家族をこのギルドのなかで保護する。ただしその場合は外出は禁止させてもらおう。もちろん衣食住はこちらで用意する。」

> 蓮斗く 「そんな暮らし誰が認めるかっての！」

> 茂く 「話は最後まで聞くものだよ。もう一つの選択肢、君達にギルドに入ってもらおう、という事だ。ギルドの人間になれば、外部からは大それた事はできなくなる。もちろんそのために『ギルド専門学院』へ入ってもらう。あの場所を5年間でちゃんと卒業すれば、ギルドのメンバーになれるということだ。どちらにせよ君達の未来を奪ってしまうが、それが私達にできることだと思う。この国のためなんだ。」

山本さんは僕達の未来を縛ってしまう事を気にしてたみたいだけど、僕達からしてみれば渡りに船だ。もともとあの誘拐事件の後に将来はギルドで働きたい、と話していた。僕たちはの意見はみんな同じだ。

> 翔太く 「山本さん、わかりました。僕らは『ギルド専門学院』

に入学したいです！」

僕の言葉にみんなが頷いた。

## 図書館

> 蓮斗く 「疲れた……なんで俺たち勉強してんだ？」

> 美咲く 「学院に受かるためじゃない。」

> 蓮斗く 「それだよ！あんどき翔太が見えはって『僕たちは受験してはいりたいです！』なんてこと言わなけりゃなあ。」

> 翔太く 「そ、そんなあ。みんな学院に受験して入ってるのに僕たちだけずるは駄目でしょ？」

> 美咲く 「翔太の言ってる事は正しいと思うよ。それに勉強しないで学院に入ったら、私達落ちこぼれるよ？」

> 優那く 「うゝ、遊びたいよ。」

> 五木く 「！なあ、オレたち結構勉強したんだし、さ。少し遊びに行かないか？」

> 凜奈< 「五木、優奈に甘すぎ。」  
> 五木< 「そ、そんなことは」  
> 美咲< 「あゝ分かった分かった。それじゃあ休憩しましょうか。」  
> 蓮斗< 「よっしゃあああああああ！！」  
> 美咲< 「ここは図書館なんだから叫ばないの！」  
> 凜奈< 「美咲も声、大きい。」  
> 美咲< 「／／／」

こんな感じで勉強していった。これでも三時間勉強ぶっとうしだつたからね、僕も結構疲れてた。  
そして受験当日。

> 蓮斗< 「なんか、落ちるきがしねえ。」  
> 全員< 「こいつ、落ちるんじゃない？」  
> 蓮斗< 「ん？お前からどうした？」  
> 翔太< 「い、いや、なんでもないよ。」  
> 蓮斗< 「そうかそうか。お前らせいせい落ちないように気をつけるよな。」  
> 全員< 「それはこっちのセリフ！」

キーンコーンカーンコーン

テスト終了をチャイムが知らせる。



僕らは集まって結果をまつた。採点は全て魔法で行っているの  
ぐに終了する。

> 翔太 < 「なんか、手ごたえあつたよ。」

> 美咲 < 「あ、私も私も！」

> 五木 < 「やっぱり勉強続けててよかったな。」

> 優那 < 「お兄ちゃん、私もできた。」

> 五木 < 「当たり前だ！優那が落ちるなんて事は絶対無いな。オ  
レが保障する！」

> 凜奈 < 「どうしたの？蓮斗。」

そう、会話に混じっていなかった一人が居たのだ。蓮斗だ。おいつ  
さつきから下向いてばっかだからなあ。もしかして上手く行かなか  
つたのかな？

> 蓮斗 < 「うつ……くっ……」

泣き声かと思慰めようとした美咲が急にビクツとなった。なぜな  
らば

> 蓮斗 < 「うつはっはっはっは!!!!くっくっくっくっ!!!!あ  
はははははははははははは!!!!!!!!」

いきなり大声で笑い出したのだ。周りからは奇異な目でみられてる  
し……もうやだ(泣)

> 翔太 < 「れ、蓮斗？」

> 蓮斗 < 「フハハハハ。なんだ、翔太？」

> 美咲 < 「蓮斗、いったい何があつたの？」

> 凜奈 < 「蓮斗、変。」

> 蓮斗く 「今回のテストだよ。ククツ。まさかあんな簡単だったとはなあ。ハハハ。」

なんかよく分からないがテストが出来たらしい。

> アナウンスく 「それでは、今から結果を発表するので皆様講堂へお集まりください。繰り返しします、今から結果を発表するので皆様講堂へお集まりください。」

> 翔太く 「それじゃあ、行こうか。」

講堂にはでっかいモニターにテスト結果の順位が張り出されていた。定員は400人である。つまり、順位が400位より低いと落ちるということになる。

> 翔太く 「僕たちの番号はどこだろう?。」

> 美咲く 「あ! あったあ! あった! 私は32位みたい。」

> 凜奈く 「……………」

> 翔太く 「凜奈どうした?。」

僕は凜奈の受験番号をみて探そうとした。そう、それはすぐに目に入ったからだ。

> 翔太 < 「え……？1位……？」  
> 美咲 < 「え！？ホンと？ほんとだ……凜奈すごいじゃん！！」  
> 優那 < 「凜奈ちゃんすごい！！」  
> 五木 < 「凜奈、やったなあ！」  
> 蓮斗 < 「うお！1位だ！凜奈、お前頭よかったんだな！」  
> 凜奈 < 「みんな、あ、ありがとう／＼／」  
> 蓮斗 < 「俺も負けてらんねえ。俺は何位だ？」  
> 翔太 < 「僕のもあった！僕は56位みたい。」  
> 優那 < 「わ、私は72位。」  
> 五木 < 「優那！やったなあ！！合格だ！！」  
> 蓮斗 < 「み、見つからねえ……」  
> 五木 < 「オレのもあった。93位だ。」  
> 蓮斗 < 「！！あった！あったぞ！」  
> 翔太 < 「何位？」  
> 蓮斗 < 「397位」  
> 全員 < 「……………受かってよかったなあああああ！！！！！！」

というわけで僕たちは揃ってこの学校への入学を認められたのであった。めでたしめでたし。

> 蓮斗 < 「ちょっと待て！あの間はなんd」

めでたしめでたし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0971z/>

---

六人のチート魔法軍団

2011年12月4日23時51分発行